

令和3年2月5日発行(毎月5日1回発行)

第61巻2月号(通巻739号)

風土



2

田を曲がる氷同じく朝のラジオ

(句集『含羞』より昭和二十三年作)

桂郎師は前年の十二月に小説の師である横光利一を亡くしています。元日には「起てど坐れど師の亡かりけり初日影」と詠むほど、呆然とした意識を露わにしています。そのような意識が捉えたのが「田を曲がる氷」であり「朝のラジオ」です。この時の目と耳は同時に働いていますが、意味付けは何もありません。放心した状態をことばにすればこのようになるのです。

入學の吾子人前に押し出だす

(句集『含羞』より昭和二十三年作)

この句の前に「入學の吾子の髪なり父が刈る」の句があり、理髪師であった桂郎師が、子の晴れの舞台に自ら髪を整えてあげるのです。「人前に押し出だす」は、一つはもじもじとしている子を前に出して、自立の一步を踏み出させると読めます。もう一つは、疎開先の小学校で、誰にも引けを取らない「吾子」であることをアピールする親の心情の表れとも読めます。

秋風を二三歩追へり見送れり

(句集『月の道』より平成十六年作)

この句には「悼 角川照子」の前書があります。「逝くものものこるも秋の蛸かな」もそのうちのひとつです。器師は以前、角川邸で照子と句会を楽しむなど交流を深めていました。その照子の死は深い悲しみを与えたことでしょう。「秋風」は魂を運ぶ風でもあります。この「秋風」は照子の魂に違いないと声をかけ、二三歩追いかけたのです。しかし「秋風」はまたたくまに向こうへ去っていききました。

何も考へない秋蝶の翅使ひ

(句集『月の道』より平成十六年作)

この句にも「八月二十五日突然倒れる」の前書があります。器師はこの日、脳梗塞で倒れ救急車で病院に運ばれました。幸い早く治療でき後遺症はありませんでした。毎日の多忙な仕事から一転して、何もできない入院生活になったのです。「何も考へない」は実感でしょう。病院の窓を過った「秋蝶」を見るときもなく、忘我の意識状態にあるのです。

冬の 水

南うみを

茹で卵こつんと立てて文化の日
石露咲いて箒もつ手に日の差して
綿虫の浮いて明日のとほくなる
冬霧を真つ白な日ののぼりゆく
アボカドのぬらりと口に冬ぬくし
作りたる畝につつ立つ柿落葉
大箒をしとど濡らして冬菜売る
冬の水波郷の沈思いまもなほ
過ぎてより冬のすみれの光かと
マフラーをはづし曝せり古希の首
寒禽のこゑ石に撥ね水を刺し
レノン忌の午前零時の霜のこゑ



竹間集

同人作品



日帰り

柿沼盟子

谷戸奥の日の差すあたり竹の春
久方の朝からの晴れ賜猛る
山茶花のかぶさり咲ける寺の磴
栗剥きつ耳すましをる長電話
力こめ拭ふ茶渋や神無月
切干しを浸けたる水に日の匂ひ
日帰りの京は晴天冬紅葉

厳戒の中

葱刻む

林 いづみ

秋声をたかむらに聴く小黒坂
郁子の実のテラスめぐらすレストラン
黄落や児童の列のくねくねと
列をなす児はそれぞれの落葉踏む
印傳屋出で外苑の落葉路
葱刻む一日雨となる夜の
四方に聳ゆる鉄壁の書籍冴ゆ

角川武蔵野ミュージアム

落葉時雨

小林 共代

武相荘落葉時雨の中にか
鳥渡る十三塔の礎石跡
木の実降る一村こぞりて白樺派
新松子僧寺尼寺ありし跡
野菊晴れ女嫁街道残りけり
高瀬川一之船入照紅葉
霜月や足裏につたふ地の湿り

仏の目

高村 令子

稲刈つて棚田の月を刈り忘る
月浄土どこへ佇ちても仏の目
ちちははの山を起点に秋の虹
古刹への坂の七折れ紅葉晴
矢の如く過去となる日々紅葉散る
独人居の夜長和ます古写真
夕暮れの風が裾吹く秋桜

冬立てり

土井 三乙

石ころのやうころと地を小鳥
窓越しの山並み蒼く冬立てり
冬に入るがさと音して紙袋
風に走る銀杏落葉や犬吠えて
機嫌良き朝納豆の良く粘り
冬晴や遠山並へ窓開く
海を見に行く冬帽の赤扱ひ

冬の草

中根 美保

牡丹粗朶焚く鼻に見守られ
箒草つのれる紅に枯きざす
朝よりもさむき昼間や漱石忌
抱かれて道渡る犬冬ぬくし
地を覆ひおほばこ冬の草となる
福々と大根の煮ゆるおでんかな
寒禽の乾きし音を立てて発つ

忘れもの

間島あきら

明日は晴れ天へ弾ける冬すすき
数へ日の畝くろぐると立たせけり
大根を育くむ真夜のひかりかな
切干や手早く動く母の指
竹伐つて海の広さを取り戻す
崖沿ひの海への小径冬つばき
忘れもののやうな小春の一日かな

笹 鳴

田中佐知子

進講の神島畏し冬風ぎぬ
南方熊楠和天皇を南田辺に迎ふ
 南方熊楠記念館 五句
 進講のフロックコート冬麗
 冬あたたか凛と孫文のパナマ帽
 冬うらら弟子よりせしめしブーメラ
 笹鳴のはたと熊楠デスマスク
 ひとつづつ頂く貝殻日短し
 熊楠の海洋々と冬晴るる

雪ぼたる

中村 洋子

うすうすと十一月は雀色
 あるだけの明るさ放つ酉の市
 蓮根掘る泥と戦ふ面構へ
 冬桜阿修羅の声を聞きたくて
 三角に手折るページの夜寒かな
 お手玉はさまざまな布茶の咲けり
 雪ぼたる祈りの島を巡り来て

赤 蕪

橋添やよひ

大熊手人の視線を奪ひ行く
 土に返る彩の極みや散紅葉
 掘り返す泥が泥鱈となる瞬時
藏山寺二句
 神留守の光秀公の念持仏
 奥つ城はお土居跡なり木の実降る
 糶田のあかるさ軽き術後の歩
 芭蕉忌や近江の甘酢赤蕪

一 詩 人

浅田 光代

指北のかすかなうづき一葉忌
 口中にのどあめ浮鴨にひなた
 うなづきにうなづき返す番鴨
 鴨眠る遅れし一羽加はりて
 蘆鴨の暮れて混み合ふ翁の忌
 火を囲むときに落葉をふはと足し
 大綿を握つてしまひ一詩人

山河集

同人作品



南うみを選

散紅葉寂光院の狭き磴
 女人とふ業のありけり冬紅葉
 散紅葉浮かべ「朧の清水」かな
 大原川の大蛇伝説山眠る
 直実の銘捨藪や虎落笛

岡本 尚子

草摺の余韻たしかや蛇穴に
 秋の墓つかめばキウと啼いてみせ
 葬列の誰か指さす冬の虹
 冬の庭石のひとつは父に似て
 寄り来るは昨日きぞの綿虫かもしれぬ

谷田明日香

小春日や干物の網を空に掛け
 老犬の良く食べて寝る小春かな
 切干の飴色深し母遠し

中嶋 陽子

切干の幅広よろし故郷かな
 山茶花やウエストポーチに小銭鳴る
 駅前の町の未来図小鳥来る
 合掌し僧の去りたる焚火あと
 休みたる石に黙礼秋遍路
 歪みにも器量の有りてくわりんの実
 竹の里ぬけて光の柿の里
 動きさうな牡蠣にライムを絞る
 吊るされて鮫鱈腑分け始まりぬ
 幕間のやうなさざめき冬紅葉
 空に描く薄墨の花冬ざくら
 モノトーンに床の木洩れ日室の花

上辻 蒼人

塚原和代子

天柱山

間島あきら

富士を背の初吟行や青木の実
一灯の照らす灰吹寒の雨
受付に孫の手ひとつ春を待つ
雨に耐へ風に耐へゐる冬の蜘蛛
奥津城の枝葉のさやぎ寒つばき
竹囃す冬雲宇津ノ谷峠かな
縁に坐し師の声を待つ初句会
宗長の山水凸凹猪の跡

峯落つる冬の竹樋の水を吐く
何の虫指さす先の落つばき
茅屋根に万の雨粒春近し
義政の茶釜の錆や玻璃扉冴ゆ
ひと弾きの冬の音せる薩摩琵琶
寒の日の歩む畳に影四つ
松過ぎの銅屋根放つ水蒸気
雲切れて一月へ佇つ丸子富士
網代戸を開き冬の日入れにけり
本陣の遺構のくきと草萌ゆる
寒禽の声に脊山の竹撓る
一発の銃声天柱山の冬

風土独語／南 うみを



直実の鉦捨敷や虎落笛

岡本 尚子

「直実」は熊谷直実のことです。平敦盛を討った猛将として有名ですが、法然に出逢い仏門に入りました。数々の殺生から仏への道が「鉦捨敷」に象徴されています。また直実の生涯が「虎落笛」に凝縮されています。固有名詞を最大限に生かしています。

肩上げの翼めきたる七五三祝

石井美智子

「肩上げ」は、子供の着物の衿を肩の所に縫いあげて置くものです。これがおろされると、成長したことになります。「翼めきたる」が、成長への願いと子の喜びの所作を伝えています。

葬列の誰か指さす冬の虹

谷田明日香

この句のよろしさは、「誰か」という不特定の人物の動きが、映画のワンシーンとして伝わるところにあります。野辺送りの黒い列と「冬の虹」とのコントラストが鮮やかです。

身に入むや迫力褪せぬ師の朱筆

赤堀美恵子

「身に入む」は秋の深まりや冷えを、しみじみと身に沁みとおるほど感じることです。作者はそれを「師の朱筆」に感じ、「迫力褪せぬ」に、師の教えをしかと受け止めています。

竹の里ぬけて光の柿の里

上辻 蒼人

目の前の景色がいつぱんに変わることを私たちは経験しています。作者はそれを「光」で表現しました。柿たわな村に出たことを「光の柿の里」と置き、世界を明るくしています。

帰り花ほつりほつりと人歩き

中嶋 陽子

取り合わせの句ですが、ポイントは「ほつり」です。「ほつり」は締まったものが解かれる状態です。「帰り花」も人の歩きもそのようだと感じたいです。決して「ほつり」ではありません。

幕間のやうなさざめき冬紅葉

塚原紀代子

この句は「冬紅葉」の有り様を芝居の「幕間のさざめき」に喩えました。「紅葉」の華麗さに比べたらよくわかります。

大根の葉の奔放を縛りけり

津川かほる

作者は今、畑の大根を括ろうとしています。ふさふさと横に縦に広がる葉をどうなだめて一括りにしようか。まさに「奔放を縛りけり」なのです。

カタカナの縦書オラシヨ椿の実

奥田 茶々

「オラシヨ」は日本のキリシタン用語で、「縛り」の意味があります。隠れキリシタンの地を訪れた作者は、カタカナのオラシヨを目の当たりにして、その苦難の歴史を反芻しているのです。

風土集



南うみを選

肩上げの翼めきたる七五三祝

秋田

石井美智子

鶴亀の目鼻点千歳飴

秋田

石井美智子

閉校にポインセチアのありがたう

秋田

石井美智子

マスクして始まる介護日誌書く

秋田

石井美智子

黄落の閑けさを踏むスニーカー

秋田

石井美智子

小春日や笑ひころげる媼どち

秋田

石井美智子

歳時記に母の添へ書き冬すみれ

秋田

石井美智子

身に入むや迫力褪せぬ師の朱筆

秋田

石井美智子

雅なる便箋ならべ十三夜

秋田

石井美智子

帰り花ほつりほつりと人歩き

秋田

石井美智子

小春日の亀連れて行く新校舎

秋田

石井美智子

教卓に「廃棄」の札や冬に入る

秋田

石井美智子

神無月職員室のドアに鍵

秋田

石井美智子

冬ぬくし芝生に蚯蚓寝惚け出で

川崎

津川かほる

大根の葉の奔放を縛りけり

川崎

津川かほる

蓮の実の乳房のやうにはちぎれて

川崎

津川かほる

古墳群訪へば纏はる雪蛭

川崎

津川かほる

蠅虻を誘ふ真昼の花八手

川崎

津川かほる

舟で着くルルドの島の石路の花

東京

奥田 茶々

切支丹の隠る洞窟冬の波

東京

奥田 茶々

カタカナの縦書オラシヨ椿の実

東京

奥田 茶々

薔薇窓の日を受く祭壇小春かな

東京

奥田 茶々

迫害の石の教会夕時雨

東京

奥田 茶々

畳椅子足してライプや小春風

舞鶴

小原美美子

豆腐屋の玻璃のくもりも一葉忌

舞鶴

小原美美子

からころと缶のドロップ寒暮かな

舞鶴

小原美美子

艇を揚ぐ竜骨しかと秋天下

舞鶴

小原美美子

海鳴りの径行き止まり三島の忌

舞鶴

小原美美子

ふらふら

上村 葉子

師系五代しつかと繋ぐ初山河
冬木の芽やがて多弁となる気配
吊るさるる鮫鱈に児の後じさり
縁側に野遊びの靴裏返し
鳥帰る髪染めること止めやうか
ふらここや往きと帰りの違ふ風
津軽三味線莫蔭に腰据ゑ花の中
大地揺する太棹の音花万朶

豆飯の豆だけ先に食ぶ五歳
峰雲や言葉少なき散髪屋
黒揚羽さきの飛来は下見かと
夏草や缶蹴りちやんばら知らない子
夏座敷大張の松脂を引く
空蟬や食い込む爪を茗荷の葉
糠床に塩ひとつかみ涼あらた
台風を迎へ撃つたる方位盤
手廻しの轆轤良夜の灯を揺らす
いつの間に薄るる指紋冬隣り
篆刻の刀の切つ先月天心
喩ふれば極楽の香とも蠟梅は

春の航

瀬戸

薫

剪定や幹に禿あり瘤のあり
うららかや船はバックで離岸する
春風や搭乗口へまづ妊婦
余白まだたつぷりありぬ蜷の道
春の航語りかけたくなる鷗
太陽へ大口開けてチューリップ
桐の花壁画は人を寄せつけず
明るさの天にとどけよ麦の秋

天道虫点字の森に迷ひ込む
這ひ這ひの尻突き上げて霧の峰
虹消えて珈琲の豆挽き始む
落蟬の天へ向く腹見開く眼
山門の幕の白さや大施餓鬼
また一人迷子秋祭は佳境
秋の昼手持ちぶさたの献血車
鉄橋の真一文字や稲穂波
小春日や角張つてゐる牛の尻
欄干の擬宝珠光れり冬入日
冬の月はしびるこゝろは哲学す
行く年の草かたまつて流れゆく